平和学習プリント

佐敷の人々はどのように沖縄戦を生き延びたのか

―知念芳子さんのお話から考えよう―

**【やってみよう：新里の人々はいつ、どこでなくなったのか】**

「平和の礎」にお名前のある方で沖縄本島で亡くなった人の数を調べてみました。平和の礎に刻まれている新里の人々は238人います。そのうち沖縄本島で亡くなった方について調べてみると以下のようになっていました。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 亡くなった時期 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 |
| 亡くなった人数 | 28人 | 73人 | 41人 | 8人 | 7人 | 7人 | 11人 | 7人 | 4人 |

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 亡くなった場所 | 佐敷 | 大里 | 玉城 | 東風平 | 具志頭 | 糸満 | 那覇 | 名護 | 不明 |
| 亡くなった人数 | 52人 | 21人 | 20人 | 1人 | 4人 | 9人 | 13人 | 50人 | 6人 |

この表をみて、疑問に思ったこと、調べてみたいなと思ったことを出してみましょう。

佐敷町史によると、佐敷全体では、1674人の方が戦争で亡くなっています。佐敷の人はいつどこでどのようになくなっていったのでしょうか。

気づいたこと・疑問



これからは、知念芳子さん（大正14年生まれ　佐敷・新里出身）の体験談から佐敷地区における沖縄戦の特徴について考えましょう。

**第1部　沖縄戦がはじまる前、芳子はどのように過ごしていたのか**

**女子青年として毎日竹ヤリ訓練**

私は佐敷村字新里の〈東佐久間前(アガリサクマヌメー)〉の長女として生まれた。戦争当時は20歳だった。

戦が来る前は、壕堀りや竹ヤリ訓練を相当させられた。訓練は新里の製糖工場のところで、男も女も一緒になって毎日行った。1,2,3の号令で「ヤー　ヤー」とワラ人形を（竹ヤリで）突いていた。今考えると、ままごとのようだと思う。青年会として（この訓練を）やっていたが、男は出征していたので、参加者のほとんどは女子青年だった。

**冗談を言いながら楽しんで壕掘り**

大里村の旧稲福区の〈新屋小ミーヤグヮー〉の後ろの山に、武部隊の壕を掘った。

新里の女性に冗談好きの人（私より 4，5 歳上）がいたが、兵隊たちやほかの作業する女性たちと冗談を交わしていた。なので、壕掘りは楽しんで行っていた。

**板で米俵を担ぐ**

壕掘りが終わると、次は佐敷の学校から野戦病院壕まで板を2枚運ばされた。野戦病院壕は旧稲福集落の西側にあった製糖工場の近くにあった。私は板を担ぎながら、そこへ行くために小谷集落の坂を通り、そして、旧稲福区のザンクビリを上って行った。この作業は1日に2回だった。

また、米俵も4人がかりで運んだ。米俵は棒で担いで、（板を運ぶときと）同じ道を通って、稲福の殿に運んだ。米を担いで坂を上るのはつらかったが、当時は若かったので難儀とは思わなかった。男がいなかったので女の人たちが力仕事をしていた。戦争当時は色々あったが、いい勉強になった。

アメリカ軍が上陸してくるまで、知念芳子さんは何をしていましたか？芳子さんのお話からまとめましょう。

**第2部　いよいよ米軍が上陸、芳子さんはどうやって生き延びたのか**

**新里集落上の壕で避難生活**

昭和20年（1945）の3月、自分たちで掘ってあった壕に避難した。父（助造(すけぞう)）は義勇兵(ぎゆうへい)として出征(しゅっせい)していたので、私は祖父母（蒲、ツル）、母（カメ）、2歳下の妹（シゲ）、親戚の佐久間（本家）のおじいさんと、その人の孫で6歳くらいの男の子（セイケン）の7名で避難した。

壕は現在のユインチホテルの北側の崖下あたりに掘っていた。私たちはその壕に避難してから、どこにも移動しなかった。

**水も食糧も豊富な壕生活**

旧稲福にいた日本軍が島尻（沖縄本島南部）に移動以降、私たちは1人の日本兵にも会わなくなった。戦争が激しくなっていた時期だったが、私は夕方になると腰に木の枝を差して芋掘りに行っていた。また、殿には米が山盛りに残してあった。以前そこに米を担いで運んで行ったことがあるから、そのことを知っていた。私は、殿から（避難している壕まで）米を担いで運んだ。

日本兵がいたところでは、早く島尻に避難するように言われていたようだ。また、百名や喜良原（どちらも現南城市）あたりの人たちも島尻に避難していたようだ。私の親戚も喜良原に避難していたようだ。新里には日本兵がいなかったので、私たちはそのまま壕にいた。

弾は私たちの頭の上をヒューヒューと飛んでいたが、私たちのところには落ちなかった。新里を超えて日本軍のいる島尻に飛んでいた。私たちが避難していた壕の近くには水が湧くところがあった。その水でご飯を炊いたり、風呂に使ったりしていた。そのため何の不自由もなかった。夜はシンメーナービ（大鍋）で米を炊き、ヤギや豚を潰して夕飯を食べ、壕の中で寝た。翌朝はアメリカ兵が壕に来たら大変だということで、朝食をすましたあと、昼ご飯用に肉を詰めたおにぎりを作って山に隠れていた。私は山の中に隠れているとき、捕虜になった住民を載せたトラックが、新里ビラ（坂）を通っていくのを見たことがある。当時は芋を主食とする時代だったが、（戦争中は）戦争前よりご馳走を食べられた。（そういった面では）喜びながら過ごしていた。しかし、シラミが大変だった。シラミはいくら潰してもずっと湧き出てきて、とても気持ち悪かった。あの体験はよく覚えている。

**情報が少なかったのが幸いだった**

避難中、誰からも連絡はなかった。ある時、山のカズラ（芋の葉）を摘むために歩いていると、刀を差した日本軍の将校らしき人たちとばったり会って、びっくりしたことがある。その日本兵たちは「心配するな。向こう（東側の海）にはアメリカ軍の軍艦がいっぱいいるから、危ないときには豊見城の軍の壕を探して行きなさい」と言っていた。（この日本兵たちは）きっと偵察のために歩いていたのだと思う。しかし、私は豊見城の壕に行く気はなかった。なぜなら、食べ物があるから逃げる必要はないと思っていたからだ。

**山の中で食べたアメリカ軍の缶詰**

私たち以外周囲には誰もいなかったので、私はたまに壕から出歩くことがあった。すると、アメリカ軍の缶詰やタバコ、石鹸などを入れた小さい携帯箱が所々に置かれていた。

私はそれを拾って壕に持ち帰っていた。年寄りたちが「これはお前たち若い人が先に食べてはいけないよ。毒が入っていたら大変だ。年寄りは食べて死ぬのは構わないから、あんた方はあとで食べなさい」と言って、先に食べた。すると、「アイエナー　こんなの食べたことないよ。ハッサミヨー　ご馳走だよ」と言って、かき込んで食べた。そして、年寄りたちは「こんなおいしいものは食べたことがない。早くあんた方も食べなさい」と言った。缶詰には卵やソーセージなどの肉が入っていた。

アメリカ軍が小箱を置いていたのは、避難民が隠れていないか様子を探るためだと思う。あとで、アメリカ軍が避難民を探していたという話を聞いた。

**壕を出て親戚の墓に移動**

ある日の朝、ガヤガヤしているのが聞えたので見に行ってみると、アメリカ兵がいっぱいいた。私たちが避難していた壕の下側は山になっていたのだが、そこにテントがあった。アメリカ軍が一晩でテントを張ったのだ。ここにいたら（アメリカ兵に見つかって）大変だと思い、私たちは壕から移動することにした。

壕を出て、新里と小谷の間にあるチジンキ山（新里の山）の方に移動した。（山の中を）歩き回っていたら墓を見つけた。その墓には、おばさん（母の妹の嶺井ムタ）の着物があった。「ここに、おばさんは隠れていたんだね」と喜び、その墓に避難することにした。

**おばさんに促されて山を下りる**

私たちが捕虜になったのは、おばさんが呼びに来たからだ。おばさんが墓に置いていた自分の着物を取りに来たとき、「ヨシコー」と私を大きな声で呼んだ。その声を聞いた私は、「大声を出したら（アメリカ軍に見つかって）大変なことになるのに」と怒った。するとおばさんは「ここにいたのか。あなた方だけがまだ出てきていない（捕虜になっていない）よ。あなた方は死んでしまったという話も出ている。早く（山から）出てきなさい」と言った。そこで私たちは、おばさんと一緒に山を下りた。

芳子のお話から、「家族が生き延びる」ために大事だったところに線を引きましょう。沖縄戦で生き延びるための知恵と工夫をまとめましょう。

**第3部　苦しかった捕虜の生活**

**新里での自由な捕虜生活**

捕虜になった私たちは、新里の瓦葺の民家（〈新垣前〉）に収容された。近くのンマイー（馬場）には金網で囲われた施設があり、アメリカ兵がたくさん駐留していた。私を含めて女たちが、その近くを歩いていると、アメリカ兵が「ハバー　ハバー」と言っていたが、私たちが両手でバツ印の仕草をして相手にしなかったら、向こうは何もしてこなかった。このアメリカ兵は作業班だと思うが、彼らは囲いの中にいて、集落内や民家付近を出歩くことはなかった。（反対に）私たちは集落内を自由に出歩くことができた。

小谷では、集団で畑に芋掘りに行った女たちの中で、アメリカ兵に引っ張られた人がいるという話を聞いたことがある。なお、近くの集落では「作業に出る」と言って、アメリカ兵相手に儲け（稼ぎ）に行く人もいたようだ。

**ヤンバルでの苦しい生活**

（しばらくして、）馬天港（現南城市）から船に乗せられた。どこで降ろされたかわからないが、久志村の東喜（現名護市二見の一地域）という小さい集落に収容された。

東喜でも配給はあったが少ししかなかった。米は1合ぐらいだし、他に食べるものはなかった。配給だけでは足りなかったので、チファンプー（フキ）の茎をゆがいて皮を剥ぎ、川で晒して灰汁を抜いて食べた。捕虜になってからの生活は苦しかった。私たちは米を少し持っていたから、まだましなほうだった。戦争中は（苦労もそれほどなく食生活は）上等だったが、捕虜になってからはアワリ（苦労）した。それでも生き延びたからよかった。

**本家のおじいさんと孫が、ケガが元で亡くなる**

ヤンバルでは食べるものがなかったから、「軍に稼ぎに行く」と言って、山に入ってアメリカ兵相手に商売をする女の人も多かったと聞いている。

東喜には何ヵ月いたかわからないが、そこで私や私の周りの人たちがマラリアに罹ることはなかった。ただ、一緒に行動していた佐久間のおじいさんと、その孫のセイケンは、ケガが元で亡くなった。

**ヤンバルから新里へ帰る**

東喜からは船で帰ってきたと思うが、（いつ乗って）どこに着いたかは覚えていない。上陸後、アメリカ軍のトラックに乗せられて新里に着いた。私の家は焼けてなくなっていた。私の家は製糖工場の側にあったので、最初に焼かれたのだと思う。

私の新しい家は、区民の共同作業で建てられた。資材はアメリカ軍から配給された。そのころは、生活がすでに落ち着いてきていて、仕事もできるようになっていたので、区民たちは自分たちで建てることができた。

知念芳子さんの体験を読んで、疑問に思ったこと、もっと調べたいと思ったことをまとめましょう。

今日の授業の感想など

＿＿＿＿＿小学校　　　年　　　組　　　　番　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿